

「なつしま」の逝きし日の面影

○藤岡換太郎（神奈川大学工学部）

私が初めて「なつしま」に乗船したのは1985年5月22日から23日にかけてで、「しんかい2000」（以下2K）によって相模湾の三浦海底谷へ潜るためでした。これは私の生涯で最初の潜航でした。以来2Kには合計7回乗船しています。調査した海域は日本列島周辺で、相模湾、伊豆・小笠原海域、日本海東縁、南海トラフおよび沖縄トラフでした。相模湾では2Kで潜航して以来2008年からHPDによる航海で都合4回の航海に参加しています。伊豆・小笠原弧では御蔵海丘、八丈新生凹地、そして黒瀬西海穴に行っています。伊豆・小笠原では潜れなかった航海が3回、また南海トラフでも潜れなくて1回潜航が実現していません。これらを合わせると2Kには10回以上、「なつしま」には15回ほど乗船したことになります。日本海東縁では「ドルフィン3K」による潜航と2Kによる潜航を行って2回参加しています。沖縄トラフでは2回とも伊平屋北熱水地域のNBCに潜っています。

これらの潜航や関連する調査から「なつしま」についての回想を述べたいと思います。

初潜航

相模湾に潜ったのは三浦海底谷や沖ノ山堆列の一つである三浦海丘がどのような岩石でできているのか知ることでした。実際には海底のゴミを初めて観察し、神奈川新聞でも取り上げられました。

伊豆・小笠原弧

伊豆・小笠原弧では北から御蔵海丘、黒瀬西海穴、八丈新生凹地、に潜航しています。しかし荒天のため3年間潜航できないこともありました。火山地形や火山岩などの観察と石の採集を行いました。御蔵海盆や八丈新生凹地では熱水を発見できませんでしたが、熱水の兆候は見つけています。黒瀬西海穴では、火山体や火山層序を下から上まで全部観察できましたが、垂直に登る大変な潜航でした。

日本海東縁

1993年7月12日に起こった北海道南西沖地震の震源近くの調査のために「ドルフィン3K」と2Kで調査を行い、海底の変動を初めて明らかにしました。噴砂や斜面崩壊、土石流、生物の死骸などを目視しました。軟らかい堆積物が鋭利なナイフで切ったようになった断面は初めての観察でした。

沖縄トラフ

伊平屋北の詳細な地形とチムニーの関係を明らかにする潜航でした。チムニーは南北に並び、小さな断層が東西に分布していました。熱水の構造規制を提唱しました。CO₂の泡が出ていました。

南海トラフ

シロウリガイの分布とその地下の地質構造を知りたかったのですが、天候が不順で潜航できませんでした。ほかの人の潜航で膨大な死骸の山とCO₂の泡の噴出を見ました。

KO-OHO-O 航海

相模湾で広報主体の航海が4回持たれました。相模湾の東西南北の潜航点で岩石や堆積物の採集や生物の観察を行いました。成果は「科学技術の「美」パネル展」で3年連続優秀賞をもらい、一般公開やBEシンポ、学会などで報告されました。アウトリーチ関係の雑誌に論文も発表されています。

「なつしま」回想

「なつしま」の速度

「なつしま」は、1981年の建造当時は確か12ノットくらい出たと思いましたが、晩年は10ノットがやっとでした。東京湾の最低速度が10ノットなので精いっぱい頑張ってやっと東京湾のほかの船の流れについて行けるほどになってしまいました。

金比羅さん

出港の際にブリッジにある神棚で金比羅山参りをするのは、東大海洋研究所の船ではなかったことなので驚きました。研究者と船員の交流が大学の船よりは明らかに良いことに感心しました。

船長たち

「なつしま」に初めて乗船した時の船長は浜中船長でした。請蔵船長、兵頭船長など多くの船長と交友を深めました。皆それぞれにクセのある方々でした。大学の船の船長にはないおおらかな方たちでした。しかし、航海を無事に終了するための精神的なケアは大変なものであったと推察します。

2Kチーム

2Kチームの方々には潜航に関していろいろお世話になりました。潜水船のハンドリングはJAMSTECにしかなかったので特に私の潜航の初期の頃にはいろいろ教わるが多かったと思います。

古い機器

現在では漁船でもマルチナロービームを搭載していますが当時はPDRや魚探で海底地形を調べていました。それでも当時は新しいものでした。PDRではワイドビームなのでどうしても水深の精度が悪く、直下の記録でしかわかりません。潜航点を決めるのに使っていましたがなつかしいものです。

食事

食事に関してはそれまで海洋研究所の「白鳳丸」や「淡青丸」を使っていたのですが、食事はあまり期待できませんでした。「なつしま」の最初の航海で驚いたのが、食事がテーブルに盛り付けられないほどたくさんあったことです。最初の航海ではノートにメモしていたのでそれを見ると、「その夜の食事は、ハマチとイカの刺身、ステーキ、茶碗蒸し、鶏肉のフライ、豆ご飯、サラダ、バナナでした。」とありました。JAMSTECの船は毎航海カレーライスが出るので私は大変ご機嫌でした。

「なつしま」の役割

「なつしま」は1981年に就航以来2015年に引退するまでの34年間にわたって調査研究をサポートしてきました。日本列島の周辺だけでなくパプアニューギニアなど広く日本を離れた地域でも活躍してきました。海洋研究の初期には最高級の調査船であったと思われます。最初はディープトウ、2K、3KやHPDなどを使って調査を行ってきました。地球科学だけでなく生物科学や地球物理、化学などの分野でも貢献してきました。非常に小さな船ではありましたがそのため研究者は家庭的な雰囲気の中で調査を行うことができました。私が海洋研の「淡青丸」を使っていたころに比べると1500トンというのはまさに軽自動車と10トンのダンプのような違いがありました。ただ揺れ方は「淡青丸」がヨットの揺れであったのに対して、「なつしま」はたらい舟のような揺れだったと記憶しています。喫水の違いで岸壁の深さゆえだと思われます。音響機器を使う船ゆえにエンジンにゴムの防振装置がついていたのは初めて知る所でした。またAフレームというのも目新しいものでした。居室も「淡青丸」に比べるとゆったりしたものでした。首席研究員室も大きな違いがありました。

「なつしま」には15航海ほど、延べ50日ほどを過ごしましたが、まるで自分の家にいるようにくつろいだ生活ができました。

これで終わりというのはさびしいものがあります。「なつしま」は長い間ありがとう。